

愛の絵

中野京子  
*Nakano Kyoko*



PHP新書

夕  
ヶ  
へ

第1章 甘美な恋への憧れ

愛の魔法

8

一目惚れ

16

片想い

24

医者が治せぬ病

32

初々しい恋の始まり

40

ラブアフェアの売り買い

48

## 第2章　そして、狂気へ

命の限り

56

嫉妬

64

愛の園

72

狂恋を鎮静させるには

80

疫病の時代の恋

88

禁断の恋

96

## 第3章 子供をめぐる愛

絵画への愛

104

きょうだい愛

112

ペットとの交流

120

えこひいき

128

慈善の勧め

136

親の愛

144

# 第4章 運命の絆

異類婚

152

仲良し夫婦

160

愛のアレゴリー

168

英雄への憧れ

176

愛が止める戦

184

最後のやすらぎ

192

あとがき

第1章

甘美な恋への憧れ

## 愛の魔法

王を魔法で狂恋させた？

強面こわもてのイングラント王ヘンリー八世は六度結婚し、妃きさい二人を一方的に離縁、さらに二人を斬首、という非情さで知られる。

とりわけアン・ブーリンとのエピソードが有名だ。王妃の侍女アンに夢中になったヘンリー八世は、彼女の婚約者を遠ざけ、王妃を幽閉同然の身にして離婚を成立させた後、アンを二度目の妃の座に据すえた。しかしアンは——イングラントに繁栄をもたらす、後のエリザベス一世を産みはしたものの——流産が続き、王が望む男児を産むことはできなかつた。

やがてヘンリー八世はアンに飽きて、もっと丈夫な若い妃を娶めとることにした。



作者不詳

《愛の魔術》15世紀末 24cm×18cm

ライプツィヒ造形美術館（ドイツ）

ただしいくら邪魔でも理由なく王妃を葬るわけにはゆかない。王権神授説のまかりとおる絶対君主国とはいえ、法治が機能している態も示さねばならない。そこでアンを裁判にかけた。罪状は「王を魔法で狂恋させた罪」。証拠は「右手の六指」。

豊臣秀吉もそうであったように、アンも多指症だったのだ。彼女の場合、小指の横が少し盛り上がっているだけで、ほとんど気づかれない程度だったらしいが、それでもそれは魔女の証とされ、首を刎ねられた（拙著『残酷な王と悲しみの王妃』集英社文庫参照）。

宮廷人や上層階級は、敵味方の別なく皆アンの無実を知っていただろう。だが一般大衆は政府の発表を信じたに違いない。

なぜなら女は愛の魔術をかけることができる、と広く信じられていたからだ。各国の異端審問所に持ち込まれた告発書にも、女が性的魅力をもちいて自分を魔法にかけて操った、とする男からの訴えが相当数あったという。

## あらまほしきヌード

ヘンリー八世と同時代、十五世紀後半に制作された《愛の魔術》（9頁）を見てみよ

う。画家はヤン・ファン・エイク（1390～1441）（『アルノルフィーニ夫妻の肖像』（13頁上）を描いた初期フランドル派の創始者）と言われたこともあったが、現在ではそれは否定され、ファン・エイクに影響を受けたラインラント地方（現ドイツ）出身の逸名いづめいの画家とされている。

板の上に油彩で描かれたこの小型作品は、魔術関連本によく掲載されているので見たことがある人も少なくないだろう。確かにファン・エイクを彷彿ほうふつとさせる細かな描写で、何とも言えぬ古拙こせつの美もある。

ヒロインの裸体は現代人の目からは奇妙としか言いようがない。だがこれが中世における「あらまほしきヌード」だった。

まるでクルミのように硬くて小さな、しかも左右に離れすぎた乳房。上半身に比べて異様に膨れふく上がった下半身。これは当時の食料事情で腸が長かったからとの説もある。いずれにせよ、腹部がリユートの裏側のような形になっているため、特大級の臍へそもありえないほど下に付いている。とはいえ面長の顔は愛らしい。最新流行の鋭く尖ったサンダルをはき、透き通った薄いヴェールを形ばかり身にまとう。

窓から陽が射しこむ明るい室内で、彼女は今、愛の呪術を実践しているところだ。恋

する相手と相思相愛になりたい、あるいは去っていった恋人の心を取り戻したい、そのための魔法。

床にばらまかれた草花、暖炉に燃える火、窓辺の凸面鏡とつめんきょうや小鳥なども、儀式の必需品であろう。だがもちろん肝心かなめのアイテムは、三本脚の椅子の上に置かれたボックスだ。

中には術をかける相手の心臓を模もした、真っ赤な大きいハート形のものを入れてある。木製か蠟製ろうせいらしい。そしてその上からスポンジをしぼって水滴を振りまく。同時に火打ち石で火花もおこす。赤い小さな粒子が描きこまれている。火と水の洗礼だ。

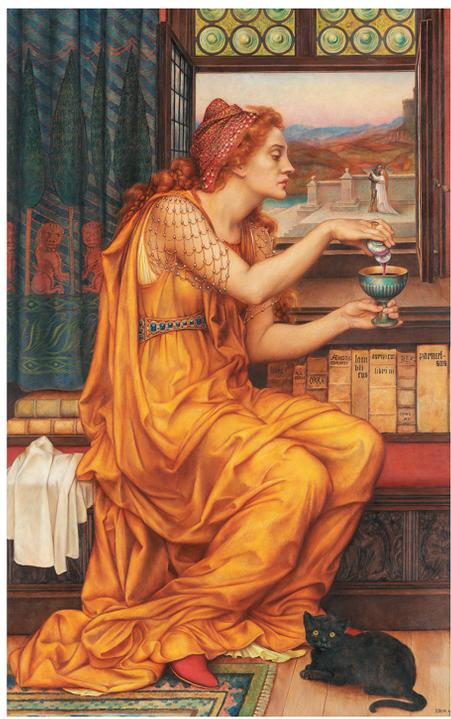
彼女のヴェールが、ハートの下をくぐって外に出ているのが見える。火と水の力は彼女と彼女の一体化を現実のものにしてくれるのだ。早くも効果が表れている。恋人が戸口に引き寄せられて来た！

宙を舞う巻紙は、この時代のいわば「漫画の吹き出し」である。ここには五本もあり、女、心臓、男、犬、小鳥、それぞれの台詞せりふがおそらくラテン語か古語ドイツ語で書かれていたと思われる。五世紀以上も昔の絵画なので消えてしまったか、あるいは後代の持ち主が何らかの理由で消してしまったか、どちらかだ。どんな言葉が記されていた

第1章 甘美な恋への憧れ



ヤン・ファン・エイク  
《アルノルフィーニ夫妻の肖像》  
1434年 82.2cm×60cm  
ナショナル・ギャラリー（イギリス）



イヴリン・ド・モーガン  
《媚薬》1903年 104.1cm×52cm  
ド・モルガン・センター（イギリス）

のだろう。まさか、次のような？

犬「最近ご主人は魔法ごっこばかりで、散歩につれてつてくれない」

小鳥「むむ、殺気！」

女「エロイム、エツサイム、我は求め、訴えたり！」

心臓「どつくん、どつくん、ドキドキドキ……」

男「あれ、なぜか元カノの家に来てしまった。しかも胸がドキドキする。まだ愛してたのかな」

——冗談はともかく、絵の中の彼女の魔術は大成功という次第。

だがこれほどめんどろな魔術は時代が下るに従い、科学頼みに変わってゆく。ラファエル前派の女性画家イヴリン・ド・モーガン（1855～1919）の《媚薬》（13頁下）がまさにそれ。恋人たちが見える窓際に座り、若いのに猫背気味の赤毛の女性が媚薬を調合中だ。顔つきからして効き目はありそう。

『魔女』という言いがかり

男は制御できない恋に直面すると、相手の女から不思議な魔法をかけられたように思  
うらしい。男とは全く違う思考と行動原理をもつ女は、もともと限りなく神秘なのだ。  
オペラにもなったメリメの『カルメン』にもそれはよく表れている。

ホセはこう語る、「私は目をあげました。そうしてあの女を見たのです。ちようど金  
曜日でした」「一目見ていやな女だと思いました」(杉捷夫訳)

自分では認めたがらない、それは一目惚れの瞬間だ。抗いようなく惹かれながら、同  
時にホセの深層心理は警鐘を鳴らしている。この女に関わると破滅する、と。イエスが  
十字架にかけられたのが金曜日なのだ。不吉さをぬぐえない。

カルメンは口にくわえていたアカシアの花を投げつけ、ホセは営倉に入れられた一カ  
月間、ずっとその花を大事に持っていた。

「花は、ひからびてしまっても、あいかわらずいいにおいだけは、うせずにいたのです  
……もしも魔法使の女というようなものがあるものとなりましたら、あの女はたしかにそ  
の一人でした！」(同訳)

カルメンに翻弄されたホセが最後は彼女を刺し殺し、死刑になるのは周知のとおり。  
女性たちよ、心せよ、男は何でも女のせいにする。